OP-117 根治的前立腺全摘除術時の尿道断端正常腺組織の検討

住友病院

森 直樹, 金光 俊行, 斉藤 純, 佐藤 元孝,
関井 謙一郎, 吉岡 俊昭, 板谷 宏彬

【目的】限局性前立腺癌に対し根治的前立腺全摘除術を施行するも、術後超高感度 PSA が測定感度 0.008 未満にならない症例をしばしば経験する。その原因の 1 つに正常前立腺組織の残存の可能性を疑い、全摘時尿道断端の正常前立腺組織の有無を検討した。【対象】2005 年 8 月から 2007 年 10 月上旬までに恥骨後式前立腺全摘除術を行った 140 症例のうち、病理組織学的に pT2 以下、断端陰性で、早期術後補助内分泌療法および放射線療法が施行された症例を除き、1 年以上 PSA を観察しえた 119 症例を対象とした。【成績】119 例のうち、尿道断端正常腺陽性 64 例、陰性 55 例。術後超高感度 PSA が測定感度 0.008 未満となったのは、正常腺陽性症例で 46.8% (30/64 例)、陰性症例で 72.7% (40/55 例) であった。【結論】術後超高感度 PSA が測定感度 0.008 未満となった症例は全摘尿道断端陰性症例に多く、正常前立腺組織の残存の有無がその要因のひとつと考えられた。

OP-118 前立腺癌におけるヒストン脱メチル化酵素 LSD1 の発現

大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学 (泌尿器科)

西村 和郎, 河嶋 厚成, 向井 雅俊, 永原 啓, 芝 政宏,
中井 康友, 中山 雅志, 高山 仁志, 野々村 祝夫,
奥山 明彦

可逆的にクロマチン構造を調節するヒストン脱メチル化酵素 (LSD1) はアンドロゲンレセプター (AR) と結合し、AR の転写活性を促進することが報告されている。しかし、前立腺癌の発癌や進展に関わる役割については明らかでない。そこで、臨床検体を用いて、LSD1 の発現を免疫組織学的に検索した。前立腺全摘標本の癌領域をマッピングし、LSD1 が最も発現している部位を各症例毎に選定し、同部位における LSD1 発現強度により、4 段階にスコア化 (0 発現なし、1 軽度、2 中等度、3 強度) した。前立腺全摘除症例 30 例において、スコア 0 2 例、スコア 1 9 例、スコア 2 16 例、スコア 3 3 例であった。LSD1 は正常組織に比し、癌組織において強く発現していた。細胞内局在は核であったが、一部核小体に強く発現していた。スコア 3 の症例では、LSD1 は核小体に発現しており、グリソンスコア高値であり、病理学的深達度も進行していた。LSD1 の発現と年齢、術前 PSA 値、術前内分泌療法の有無には関連性を認めず、病理組織学的悪性度と関連していた。AR との共発現のパターンについても検討し、報告する。

OP-119 前立腺癌における核酸代謝酵素 mRNA 発現に関する検討

松山赤十字病院泌尿器科

矢野 明, 北野 弘之, 花山 亜紀, 宮本 克利, 尾澤 彰,
田丁 貴俊, 藤井 元廣

【目的】前立腺癌組織における Thymidylate synthase (TS)、Dihydropyrimidine dehydrogenase (DPD)、Thymidine phosphorylase (TP)、Orotate phosphoribosyl transferase (OPRT) の mRNA 発現を測定し、臨床病理学的因子・予後との関連について検討した。【対象・方法】対象は前立腺全摘除術を施行された 172 例、年齢は 68 歳、PSA 値 7.2 (2.8-111.2) ng/ml であった。臨床病期は B 0 91 例、B1 39 例、B2 28 例、C 5 例、不明 9 例、分化度は高分化 65 例、中分化 66 例、低分化 17 例、Gleason score (GS) は 6 17 例、7 104 例、8-10 41 例であった。手術により得られたパラフィン包埋標本より RT-PCR 法を用いてそれぞれの核酸代謝酵素 mRNA 発現を測定した。【結果】PSA 値と TS、DPD、TP、OPRT の mRNA 発現に関連は見られなかった。分化度との関連では低分化癌を含む症例において TS の発現が有意に高かった。術前療法の有無で発現を比較すると、有りの群において DPD と TP の発現が有意に高く、OPRT の発現が有意に低かった。予後については、補助療法の有無に関係なく OPRT 発現が低い群において PSA 再発率が低い傾向にあった。低分化癌を含む症例では TS 発現が高い症例での PSA 再発率が高かった。【結語】前立腺癌の術前療法により OPRT 発現が低下することが示唆された。前立腺全摘除術症例において、OPRT、TS が予後因子の一つになる可能性がある。

OP-120 高齢者の潜在前立腺癌において MnSOD 遺伝子多型 (V16A) AA 型は危険因子である

大阪市立大学大学院医学研究科泌尿器病態学¹⁾, ニュー
ヨーク州立大学シラキュース校泌尿器科²⁾, パリ大学泌尿
器科³⁾, ニューヨーク州立大学シラキュース校病理学⁴⁾

井口 太郎¹⁾, Wang Ching²⁾, Haas Gabriel²⁾,
Delongchamps Nicolas³⁾, de la Roza Gustavo⁴⁾,
長沼 俊秀¹⁾, 鞍作 克之¹⁾, 内田 潤次¹⁾, 川嶋 秀紀¹⁾,
仲谷 達也¹⁾

【目的】前立腺癌における MnSOD 遺伝子多型 (V16A) の解析はいくつかの研究が報告されたが、その結果は一定していない。その一因は Control 群に 30-50% の潜在癌の存在する Verification Bias と考えられる。我々は Control 群に潜在癌が含まれない剖検検体を用いることにより、MnSOD-AA 型が前立腺癌においてリスクであることを明らかにした (UROLOGY 72 (2), 2008 238-42)。しかし、発症前の前立腺癌が Control 群に含まれるなどの Verification Bias は完全に排除されていない。今回、我々は前立腺癌の有病率が plateau となる 71 歳以上の検体において MnSOD-AA 型がリスクとなるかを検討した。【方法】前立腺の病歴のない剖検前立腺 186 検体 (45-92 歳) から genomic DNA を抽出。その DNA を PCR restriction fragment length polymorphism 法にて解析を行った。【成績】186 例中 57 例 (30.6%) に前立腺癌が検出され、71 歳以上では 70 例中 32 例 (45.7%) に前立腺癌が検出された。MnSOD-AA 型は 71 歳以上群においてはリスク (OR=2.92, 95% CI: 1.04-8.16) であったが、70 歳以下群においては有意差が見られなかった (OR=1.37, 95% CI: 0.56-3.34)。【結論】MnSOD-AA 型は高齢者潜在前立腺癌のリスクであるが、70 歳以下の群では Verification Bias が影響している可能性も否定はできない。